

教育事例

施設介護実習前後の介護に対する学び（認識）の変化 —A校における、第1段階介護実習終了後アンケートの評価—

加藤みち代、伊藤希久美（佐久大学信州短期大学部）

Change to the care before and behind care training in care welfare facilities to study (recognition)

— Evaluation of the questionnaire after the end of first phase care training in A school —

Michiyo Katou, Kikumi Itou
(Department of Shinshu Junior College, Saku University)

Abstract:In order to acquire a care worker's qualification, training in a nursing home is required. About the impression of this care training, the questionnaire survey was conducted on the care student of A schools. The contents of the questionnaire were the contents "what kind of point the point that impressions differed greatly is after carrying out to training, before going to have training." The result of the questionnaire was analyzed and it inquired for the purpose of harnessing in the education of future care training.

Keywords:Care worker, Care Student, Care worker education, care training

I. はじめに

介護福祉士養成課程において、介護実践能力を身につける為に介護実習の果たす役割は大変重要である。2年間の養成課程の中で合計450時間の介護実習が課せられており、A校では、第1段階実習（1学年後期・12日間）、第2段階実習（2学年前期・21日間）、第3段階実習（2学年後期・23日間）、居宅介護実習（2学年前期・2日間）と設定している。介護実習に行くごとに、また、実習の段階が上がるごとに目を見張るような学生の成長が見られ、介護実習が学生に及ぼすプラスの効果をもどる教員も実感しているところである。

澤田は「介護実習から得られる効果は計り知れないものがあり、学生自身の人間性も成長させ、専門職者としての姿勢や態度、介護観を構築する場としても最適の学習環境」¹⁾と述べている。このことは、実習終了後に実施する学生アンケートからも裏付けされる。特に、初めての实習である第1段階実習後、学生の利用者や介護の仕事に対するイメージが大きく変化していると感じる。

A校の第1段階実習は、1学年の後期（11月）に設定されている。1クール6日間の2クールで構成されており、認知症グループホームと障害者支援施設の2種類の

施設実習を体験学習する。入学してから第1段階実習まで講義・演習を中心に時間をかけ基本的な知識や技術を学んでからの現場実習である。介護福祉士を目指して入学した学生ではあるが、施設に初めて行くという学生も多い。中には認知症高齢者や障害者の方達と実習で初めて接するという学生もいる。実習前に学生たちが抱いていた利用者へのイメージや介護の仕事に対するイメージが、実習後にどのように変化したのか。また、そのような学生の意識の変化が今後の学習へのモチベーションにどのように影響していくのかを把握するのは意義があることと考える。

そこで今回、学生にとって最初の実習である第1段階実習終了後のアンケート結果を分析する事で、介護実習が学生にどのような学びや変化を与えるのかを考察し、今後の介護実習指導に活かすことを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象：2013年度第1段階施設介護実習（以下第1段階実習と略す）を行った1学年学生47名。
2. 第1段階実習期間（各クール6日間）：
第1クール：2013年11月13日～11月20日

- 第 2 タール：2013 年 11 月 22 日～11 月 29 日
実習時間は、午前 8 時 30 分前後～午後 5 時 30 分前後（各実習施設により前後あり）
3. アンケート実施時期：第 1 段階実習終了後の授業内において実施。
 4. 方法：質問紙法を用い、授業時間内に回収。
 5. 倫理的配慮：アンケートは実習終了後の個別指導も兼ねていたため、記名式としたが、今回の研究に当たっては、記名は関係なく、個人が特定されないよう一括して集計を行った。
 6. 調査内容：質問事項「実習の印象について、実習開始前と終了後とで大きく異なった点はどのような点でしたか」。回答は自由記述（複数回答可）とした。
 7. 分析方法：アンケート記載内容を、KJ 法を参考に分類し、分析検討を行った。

III. 結果

アンケートに記述された回答を、KJ 法を参考に分類をした。その結果「利用者（認知症高齢者・障害者）に対するイメージ」「施設に対するイメージ」「職員に対するイメージ」「学生自身の考え」の 4 項目に分類することが出来た。具体的な記述は表 1. 2 に示す。いずれの項目においても、実習前はマイナスのイメージを持っていたが、実習を通してプラスのイメージに変わっていた。

具体的には、認知症グループホームでの実習前は、認知症高齢者の方に対し「対応が大変」「物忘れが多い」「感情のコントロールが難しい」「自立度が低い」といったマイナスのイメージを持っていたという回答が出された。しかし、実習を通して「コミュニケーションがとれる」「感情がある」「記憶ができる」「知識がある」「自分で出来る」など、マイナスのイメージを持っていた全ての学生が、プラスの回答に変わっていた。障害者支援施設での実習前後においても、障害者に対し「怖い」「大変」「何も出来ない」「コミュニケーションが取れない」というイメージを持っていた学生が、「そのイメージがなくなった」「コミュニケーションがとれる」「出来る事がある」と回答している。

認知症グループホームのイメージについて実習前は、「忙しそう」「みんなで同じ事をする」「1 日ボーっとしている」等の回答が得られたが、実習後は「楽しそうに生活している」「のびのびと過ごしていた」「家庭的な雰囲気」だったとの回答が得られた。障害者施設に対する実習前のイメージについても「冷たい感じ」「怖いイメ

ージ」を持っていたとの回答が得られたが、実習終了後には「時間がゆったりしていた」「活気があった」「温かい印象」「レクリエーションや行事が沢山ある」等のイメージに変わっていた。

一番回答の多かった内容は、学生自身の考えについてであった。認知症グループホームでの実習前は「緊張していた」「何を話したら良いかなど不安」「何もできない」と感じていた学生が、実習終了後は「コミュニケーションがとれるようになった」「積極的に行動できた」「介護に対するやる気が出た」「視野が広がった」「学校での基礎の勉強の大切さがわかった」等の回答をしている。障害者支援施設での実習前後においても、実習前は「どのように接したら良いかわからない」「不安」「失敗が無いように緊張していた」「コミュニケーションはとれるか」等の回答が得られていたが、実習後は「楽しかった」「自分から積極的にコミュニケーションがとれた」「障害者との接し方を知ることが出来た」「とても充実していた」「技術に自信が持てた」「授業の大切さを知った」「意識が変わった」等の回答が得られた。

また、認知症高齢者の方との関わり方について「利用者さんのことを思って接することが大切」「どのようなニーズを持っているか考えるようになった」「利用者さんの心に寄り添うにはどうしたらよいか考えるようになった」「安全に気を遣うようになった」等の回答が得られた。同じように障害者に対しても「利用者の気持ちを考えることが大事」「人間関係をより良くするコミュニケーション技術が思っていた以上に重要」等の回答が得られた。

IV. 考察

上記の結果を受け、実習を通して介護に対する学び（認識）がどう変わったか、実習担当教員としてどのような関わりが必要であるか、2 つの視点から考察をしていく。

1. 利用者や施設に対するイメージについて

実習前の学生の状況としては、実習にかかわる科目担当教員は、それぞれの教授範囲内において、認知症高齢者もしくは障害者の特徴や症状、コミュニケーションの取り方など、一般的な状況について授業を行うが、そこで取り上げる内容や事例は、症状の落ち着いた状態よりも、症状がある状態を取り上げることが多く、授業を通して認知症高齢者や障害者を初めて知る学生にとっては

その時の印象が強いことが考えられる。もちろん、取り上げる事例については一例に過ぎず、概要も含め対応の方法なども一緒に教授している。実際の現場を知っている者からすれば、一例に過ぎないことは容易に理解が出来る。しかし、「学生の多くは核家族の中で育ち、高齢者とのふれあいはおろか、高齢者像をイメージする適切な情報を持っていないというのが最近の実情です。障害者についても同じく、ほとんどの学生が出会いを経験しておらず、ボランティア経験者もまれです」²⁾と述べているよう、A校においても同様の状況にある。実際を知らない学生にとっては、授業で学ぶ一つ一つが、認知症高齢者や障害を理解する材料の全てであり、それをもとに、自分なりのイメージを作りあげている。この結果、実習前に学生が感じていたような、認知症高齢者の方は「対応が大変」「物忘れが多い」、特に知的障害者に対しては「怖い」といったイメージが強く印象付けられ、実習に対する不安や緊張につながっていることが考えられる。

しかし実習を通して、実際の利用者の様子や施設の雰囲気を見て感じることで、認知症高齢者や障害者に対する判断材料が増え、同時に、授業で学んだ状況を実際に経験したり、他にも様々な事例や対応方法があること、介護福祉士がどの様に関わっているのかや、その仕事も知る。その結果、「大変」「怖い」だけではない状況であることを理解することができる。澤田らが介護実習の意義として挙げている1つに「校内で学ぶ科目や演習の理論の具現化と介護福祉全般の統合化(まとめ)が図れる」³⁾という項目がある。まさにこのことであると考えられる。学内での学びを、実体験を通して理解を深め、これからの学びや介護の仕事に対するやりがいへとつながっていくこと。これが、今回のアンケートで明らかとなった、プラスのイメージへの変化につながった要因であると考えられる。

これらのことより、実習担当教員の実習前の関わりとして、過度の「緊張」や「不安」を抱かないよう、その「緊張」や「不安」の要因はどこにあるのかを見極め、解消につながるよう支援をしていくことが必要であると考えられる。また、実習を通して感じたり発見した学生の視点を、しっかりと受け止め、次につながるような支援が必要であると考えられる。

また、認知症グループホームにしても、障害者支援施設にしても、授業で学んだ症状がある方であっても、対応の方法やかかわる時間帯、その時の身体的・精神的状況など様々な要因によってその症状のあらわれ方は異なる。

実際、学生が関わる時間帯は昼間であり、認知症特有の症状である帰宅願望や夜間の徘徊といった症状を経験する機会は少ないことが考えられる。合わせて、症状があらわれている状況は利用者にとっては苦痛が強い状況であるため、そうならないよう、一人一人の状況に合わせて職員は専門的な知識、技術をもって介護を行っているわけである。ただ「楽しそう」「温かい印象」と、利用者の様子だけをとらえるだけではなく、「楽しんでいただく」「穏やかに過ごしていただく」ために、職員がどのように関わっているのかまで、併せて理解ができるよう関わる必要があると考える。

2. 学生自身の変化について

最も多くの回答が得られた、学生自身の変化については、「コミュニケーションはとれるか」、「緊張」や「不安」など、実習前は自分のことを中心に考えていた印象があるが、実習を通して利用者中心で物事を考えることが出来るようになっていた。

また、実習を通して自信を獲得したり、今後の課題を明確にしている学生も多い。同時に、実習を通して学内での授業の必要性を再認識するとともに、介護福祉士としての専門性や役割を理解し、自分の目指すべき「介護福祉士像」を描いていることが考えられる。

川延が「社会福祉専門科目の授業を理解するには、社会福祉の様々な領域の現実を多少でも知っている必要がある、その意味でまず現場を見聞きし体験を通して知ることが課題となる。しかも、その課題はたんに知ることだけではなく、社会福祉学習への動機を補強し、さまざまな社会福祉実践への興味関心へと展開していくものでなければならない。(中略)基礎的な実習では、その実習にいく学生たちに(中略)学習動機を深めさせ、興味関心の定着を図り、学内の授業科目への展望を持ちうるような援助が行われることが必要である」⁴⁾と述べているように、実習を通して今まで得ることのなかった多くの経験や、利用者や施設、介護の仕事に対する「興味関心」が、単なる「興味関心」で終わらないよう、学内授業の動機付けや次の課題に向けたモチベーション、学生個々の「介護福祉士像」の構築に向けた足がかりとなるよう支援していく必要があると考える。単に「答えだけを伝える」のではなく、「なぜそうなのか」「なぜそう思うのか」「どのような支援が必要なのか」を一緒に考え、答えを見つけていくことが必要であり、この部分に対する、実習担当教員の果たす役割は重要であるといえる。

筑紫らは「介護は実践の科学であり、実践を通して学ぶことの意義は大きい。また、実習を通して介護福祉士として大きく成長するのであり、専門職業人として育つのである。」⁵⁾と述べている。今回のアンケート結果からも示唆されるよう、実習での学びが学生に与える影響は大きい。実習が、学内での学びを基礎として、介護の実際を知り、「介護」についてさらに理解を深めていく場であることから、学生の学びがより充実したものになるよう、実習担当教員としての役割をしっかりと認識し責任を持って学生を育てていくことが必要であると考ええる。

V. まとめ

1. 介護実習を通して認知症高齢者や障害者と初めて接する学生が多く、学内での授業が学生に与える影響は大きい。
2. 実習に対し「不安」や「緊張」を抱えながら、実習初日を迎えている現状がある。実習に対し過度な緊張や不安を抱かないような関わりが必要である。いかに教授していくかは、実習担当教員に課せられた課題である。
3. 実習を通して学生は大きく成長し、専門職種者としての認識を高める。その結果、学内での授業の必要性や、基本的な知識・技術の必要性を再認識する機会となる。この機会を、学習の動機付けやモチベーションにつながるような教授が必要である。

【引用文献】

- 1) 澤田信子 小櫃芳江 峯尾武己編：可能性を信じ共に学び・育ち・創る 介護実習指導方法、社会福祉法人全国社会福祉協議会、p60、2006
- 2) 澤田信子 小櫃芳江 峯尾武己編：可能性を信じ共に学び・育ち・創る 介護実習指導方法、社会福祉法人全国社会福祉協議会、p74、2006
- 3) 澤田信子 小櫃芳江 峯尾武己編：可能性を信じ共に学び・育ち・創る 介護実習指導方法、社会福祉法人全国社会福祉協議会、p77、2006
- 4) 川廷宗之：社会福祉教授法、川島書店、p180、1997
- 5) 介護福祉実習指導研究会編集 筑紫恒男発行：介護福祉士選書 18 新版介護福祉実習指導、建帛社、p1、2008

表1. 認知症グループホームでの実習終了後

	実習前	実習後
認知症高齢者に対するイメージ	<ul style="list-style-type: none"> 徘徊や不潔行動などへの対応が大変な感じ 物忘れがひどい 物忘れを頻繁にするだけ 自分の意思を曲げない 怒っている人がほとんど 介助が必要な人が多い 神経質な利用者さんたちがいる 一日中ボーっとしている 	<ul style="list-style-type: none"> 認知症でも記憶がしっかりしている方もいる しっかり覚えている事も沢山ある 認知症に対するイメージが良い方に変った 全て自分で出来る方が多く驚いた 高齢者はたくさん知識を持っている みんなそれぞれ違う 人柄 自分を持っていて、他人への優しさも持っていて、個性があるというイメージを持つようになった 認知症の方は認知機能は衰えていても感情は豊かに残っているので、性格や生活歴を把握したうえで、その人を尊重した関わりが大切である 利用者様の優しさや素直な面(純粋な面)を知ることができた 歌を歌ったりレクリエーションをしたりして穏やかに楽しそうに過ごしていた 認知症は進んでいてもコミュニケーションをとることができたならば、その方の記憶の片隅に残っていることがわかった 思ったより自立している方ははいて、98 才でも歩けたり普通に話せたり思ったより元気だと分かった 車いすに乗っているからと言って、全く歩けないというわけではないこと 一日中ボーっとしているような利用者さんでも、優しい気持ちだったり感謝の気持ちがあり、それを表現することができる 認知症というよりは、年齢こともなっているものが多いのかと思った(病気でではなく衰え)
認知症グループホームに対するイメージ	<ul style="list-style-type: none"> 介助が必要な人が多い みんなで同じことをする もっと動けなかったり、食事介助も必要な人が多い 施設というのほどこでも忙しい 	<ul style="list-style-type: none"> 穏やかな表情で過ごされていた 家庭的な雰囲気 楽しそうに生活していた 利用者さんは本当の家のようこのびのびと過ごしていた ゆったりしていた のんびりとした施設であった のんびりと暮らしている とても明るい場所 障害施設とグループホームの現場の雰囲気が全く違う 一人ひとり活動されていることがあった もっと介助が必要な人居者が多くいると思っていたが自立度が高かった
職対に対するイメージ		<ul style="list-style-type: none"> 介助方法など、授業で習ったことは基本であり、それを応用して一人ひとりにあった介助方法をみつけ実施していた
自分自身の考え	<ul style="list-style-type: none"> 緊張 実習先に行っても何もできない 不安 コミュニケーションの取り方が分からない 職員さんに付きっきりで行動して一日を過ごす 業務を体験させていただける 	<ul style="list-style-type: none"> 演習では分からなかったことが実習で分かった 楽しい実習だった 実際の介助を見たり行ったりができた ほとんど見学であった 職員さんより利用者さんという時間の方が長かった 緊張していたが、徐々にほぐれ安心して自分の目標を達成できた コミュニケーションが図れるようになった 相手の方は対人であるということ 始めは何を話したら良いかわからなかった不安があったが、様々な会話ができるようになった 失敗を恐れず、一度挑戦してみる姿勢が大きく異なった点だと思う 記録が大変 アセスメントがどれ程大切かが分かった 声の大きさ 学校での基礎の勉強の大切さがわかり、授業中は寝ない しっかりと利用者さんのことを思って接することができたこと 利用者の方の心に寄り添うにはどうしたら良いのかを考えられるようになった ただ話すだけでなく、利用者さんがどのようなニーズを持っているかを考えるようになった 周りを見て、以前より安全に気を使うようになった レクリエーションを行った際に、私の知らない歌や指体操があり、今後の実習では様々なレクリエーションを覚えていくことが大切であると感じた 認知症の症状(徘徊行動や収集癖、日内変動)を学んだ 生活歴を普段の生活の中でも見つけることができると感じた 移乗等の介助以外にもコミュニケーションをとったり、心に寄り添った言葉かけを行ったり、介護技術を要さないがとても大切なことがあることを知ることができた 利用者様に対するコミュニケーションの仕方、授業で習っているだけでは意味がなく、実際にやってみることが重要である どんな利用者さんにもまず関わってみる事が大事 開始前は緊張していたけど、終了後はもっと実習したい、期間が少なすぎたと思った グループホームでの介助を知ることができた 介護に対するやる気 一人ひとり違うので、その人にあった声掛けをする 勉強になった

表 2. 障害者支援施設での実習終了後

	実習前	実習後
障害者に対するイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・気分が暴れたりする人が多い ・とても不安 ・何もわからない ・何もできない ・支援が必要な人 ・重度の障害の方は何も理解することができない ・会話が困難 ・コミュニケーションがとれるか不安 ・気持ちが重い ・怖い 	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いている人が多かった ・できることが多くあることを知った ・実習中に、様々な利用者の方と関わる中で恐怖心もなくなり、最終日にはもっと来たいとさえ思った ・知的障害者の方でもコミュニケーションは関わり次第でしっかり取れる事がわかった ・伝えたいことは分からなくても、態度や気持ちは理解することが出来る方もいるということが分かった ・患者さんとのコミュニケーションをとっていくうちに、そのような思いはなくなった ・利用者さんの気持ちを考えることや、表情や目線を合わせることによって会話をすれば、たくさんのコミュニケーション方法があるのだなと思った ・はじめはひくひくしていたが、慣れるとそれほど健常者と差がないことに気づき、怖いというイメージはなくなった ・普通に会話ができる人がいる ・一部介助であったり、コミュニケーションがとれたりなどあり、できないことを介助することが多かった
障害者施設に対するイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・大変なことが多い ・冷たい感じ 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者施設は時間で業務内容が決まっていたため、時間に追われていた ・思っていたよりも皆さんが自由に動き回っていて活気があった ・レクリエーションや行事などがたくさんあったり、給食会議というものには利用者さんも参加して意見を述べていたので、とても良い雰囲気だと思った ・ほとんど地元の方で気軽に実習を行う事が出来た ・障害者施設にあまり良い意識を持っていなかったが、実習を通して、もっと居たいなと、意識が変わった ・実習前は、高柵ベッドが使われているので、冷たい感じなのかと思っていたが、患者さんも職員さんもみんな温かくて良い病棟、職場だと感じた ・時間がゆったりとしていて、そこまで苦に感じなかった
職員に対するイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者が困難なく生活できるようにサポートをするのみだと思っていた 	<ul style="list-style-type: none"> ・心のケアや気持ちを探り、各利用者さんにあった介護を提供するという印象を持った ・思っていた以上に心がこもっていて温かい印象を持った ・個人をとても大事にしていた ・障害があっても出来る所すべて自分でやり、全てを介助してはなかった ・スタッフの皆さんがとても協力的に関わってくれたり、学びやすい環境を作ってくれた事に驚いた ・何をすべきかを考え、職員さん同士で助け合いながら介助を行っている様子を拝見し、協力の大切さを強く感じる事が出来た
自分自身の考え	<ul style="list-style-type: none"> ・大変 ・新しいことを学ぶ体験 ・不安 ・失敗の無いようになど、とても怖かった ・コミュニケーションよりも介助の方が大切 ・緊張していた 	<ul style="list-style-type: none"> ・おむつ交換が開始直後の時よりも抵抗なくできた ・排せ介助の仕方 ・少し技術に自信が持てた ・本当に授業の内容と実際の介助では、声掛け、介助方法、コミュニケーションの方法が一人ひとり違う ・学校で学んだ事とは違う事を行っていた ・利用者さん一人一人の癖や性格などがわかり、どのように対応すれば良いかわかった ・終わってみるともちろん大変ではあったが、とても充実していて楽しかった ・利用者さん、職員の方と仲良くなれたので良かった ・人間関係をより良くするコミュニケーション技術が、私が思っていた以上に重要なのだと感じた ・印象が変わったことは特にないが、障害についての知識を、講義をもっとまじめに受けて増やしていきたい ・利用者さんと接して、現場の様子や介助などを体験することで少しは成長できたのかなと思う ・前はコミュニケーションよりも介助の方法の方が大切だと思っていたが、何をすることもコミュニケーションが大切だということが分かった ・精神的に辛い時もあったが、学んだ事も沢山あった ・1日目は驚くことなど初めてで、大変なことが多かったのですが、6日目の頃になると色々学ばせて頂き、利用者さんとのコミュニケーションも取りやすくなった ・自分から積極的にコミュニケーションがとれた ・始めは何をするかも分からなかったが、少しずつ分かるようになっていき、職員の方にいろいろ質問できるようになった ・やってみないと分からない事がたくさんあった ・少しずつ面白くなってきた ・やりきったなど感じた ・知的障害者との接し方などを知ることが出来た ・障害者施設には初めて行ったので、最初は利用者さんとのように接したら良いかわからず利用者さんとコミュニケーションもなかなか上手に取れずいたが、だんだん慣れてきて、コミュニケーションの取り方をしつかり学ぶことが出来た ・今後の授業で、どうしてこの授業、実技をするか、自分なりに考えて授業を行いたい ・実習の前は、学校で学んだことしか知らなかったが、実際の施設に行くことでいろいろなことを知れた ・授業の大切さを知った ・たくさんのことを教えていただき楽しかったし、行くことが出来てとても良かった ・6日間では足りないと思えたこと ・就職への視野が広がった